



花の香りは薄れていた。

昭和十五年の春も過ぎた頃である。桜は既に散って、葉が木々の枝に溢れ鮮やかな緑を光に躍らせ風に鳴く。大日本帝国海軍航空隊の基地は、花びらを失えども生命を溢れさせる桜の木々に囲まれていた。

穏やかで華やかな風景に取り囲まれて滑走路はある。野原といっても誰も気づきはしないほどに、桜だけでなくこの先の季節に向けて一斉に目を覚ました野草らが手を伸ばすかのようにして太陽を追い、滑走路は一面の新緑であった。

その滑走路の外周を、一人の海軍航空隊の戦闘機乗りが走っている。どうやら一万メートルの罰を受けたようであった。

一万メートル—海軍航空隊の搭乗員らにとっては至極一般的な訓練でもあり罰でもある駆け足のことだ。しかし、ただ走ればよいというものではない。速度は落してはならない。疲労と苦しさに喘いでも顎は出してはならず背中を曲げることも許されなかった。部隊によって違えども、ここに展開している部隊ではそのような決まりになっていた。駆けだしの速度をうまい具合に調整しても一遅すぎると上官からの鉄拳が降るが、数分も走れば息は上がった。その上完走するまで、同じ風景を見続けて走り続けるのである。どこまで走っても平坦で、木々に囲まれ長閑な原っぱに囲まれて一何の変哲もない景色の苦痛に耐え、永遠とも思える時間を回り続けるのであった。飽きて集中力を欠かせば速度は落ちる。傍目にはいかにも苦しげだと言わんばかりの姿の走りになり、足は前に出なくなる。そんな様々な敵に打ち勝ち、最後にあるのは一彼の場合は腕立て伏せであるかもしれない。

「全くよ、少し芸をただけで、こんなことさせなくてもいいじゃねえかよ」

航空服のまま走らせているこの搭乗員の名は杉本隆博といった。大陸で戦争が起こってからもうどのくらいか—彼は既に歴戦の海軍航空隊搭乗員としてその名を轟かせていた。彼の愛機には落した敵機の数だけ日の丸が並んでいる。まだ飛行時間の浅い搭乗員らなどは、それを眩しく目を細めて見上げたものだった。

熟練の域にあるほどの搭乗員であるというのに、こうして杉本が途方もなく広い滑走路を見回しながら走っている姿はよく見る光景である。杉本は少年の熱い心を宿したまま大人になった男である。遊びたくてたまらない、動かずにいるのが嫌いな、やんちゃな少年のままであった。部隊では一人だけ長髪にし、上官の説教を浴びせられても顎まで伸ばした髪をかきあげて見せるほどだった。何度も怒られ殴られても平気な顔をしている。ガキ大将さながらの男を、一部の士官たちは持て余していた。

今日、彼がこうして走っている理由は、訓練中に宙返りを披露したからである。

彼のいる部隊は、新しい戦闘機の前線へ投入するべく、その操縦方法とそして機体の欠陥を焙りだし、手を加えている最中であつた。日々の猛訓練も最終段階を迎えており、誰の心にも余裕と自信に溢れていたが、前線からは毎日のように実戦投入を催促され、かたや技術者たちは一高速を出すと重くなる操縦かんをどうすることもできずにおり、緊張と焦りは続いていた。その

最中での宙返りは、見事に上層部の痛に障り、訓練を終えて杉本が地上に降り立つと同時に鉄拳が降り注いだのであった。

汗で額に張り付いた長い髪をかき上げて、杉本が兵舎へ回り込むと、その出入り口のところに、彼の中隊の士官である山崎がいた。

煙草を吸いながら、柔らかそうな綿あめのような白い雲の浮かぶ空を見上げていた彼は、不満と疲労に顔を歪めた杉本に気がつく、さっと光が差したように微笑んで手を振る。

「あと半分だぞ。ちゃんと見てやっているからな。頑張れ」

この上官は基地で最も有名な優男であった。いつも笑みを絶やさずにおり、優しく部下を見守っている。非常に世話好きであり、新米搭乗員からは母親のように慕われていた。しかし、一見穏やかで物静かなようでありながら、その決断力と判断力は士官の中でも随一であり、嫌うものは一人としていないような男だった。非番の日に店に行けば女に困らず、外を歩けば女学生が溜息をつく。猛者ぞろいの部隊の中にあっても穏やかで、彼を怒らせる方が困難であった。杉本が最も苦手としている男でもある。口答えしても手ごたえはまるでない。のらりくらりと反論をかわし、反抗するだけ疲れを感じてしまうのだ。

それだけではない。母親のごとく慕われるこの中隊長は、まさに母親そのものなのであった。彼の欠点なのか長所なのか定かではないが、部下に対して幼い子どもと同じように接するのである。

この罰を下した時も、杉本を殴りつけた士官と杉本がまさに一触即発、殴り合いになろうかという空気をいとも簡単に破ったのも彼であった。山崎は不意に目を輝かせて、彼らの間に入った。そして頭に血を上らせている杉本の顔を、優しく大きな手で包むと、

「分かった、分かったぞ。お前の反抗はかまって欲しいという裏返しなんだろう？」

杉本は氣勢をそがれ、山崎を見た。何かを言わねばならないが、杉本が何事かを言うのを今か今かと待つ山崎の笑顔を見ては言葉など出てこない。しかし、この男を殴る気にもならなかった。

「山崎隊長、俺は」

「案外かわいい奴なんだなあ。大丈夫、大丈夫。俺が付き合ってやるから、頑張っって走ろうな」ようやく喉までこみあげた杉本の反論は、山崎の満足げな笑みに容易に撃退され、それどころか山崎はもう二十五になろうという男の頭をくしゃくしゃに撫で、本人に有無も言わずこうして滑走路に引きずり出してしまったのだった。

「隊長、勘弁してくださいよ。せ、せめて航空服を着替え……！」

遠ざかりながら杉本は精一杯叫んだ。それに答えて山崎は大きく手を振った。

「頑張れよ、日本男児」

山崎の横には湯飲みときゅうすが置いてあった。

「つ、付き合うの意味が……ちげえよ、隊長！」

こうもずっと見られていては、誤魔化すこともできないではないか。山崎には悪意も他意もないから、杉本の苛立ちは地を駆ける足に投げ出すしかない。

「ちくしょう」

杉本がこの苦行を早く終わらせようとようやく諦め、足に力を込めた時であった。上から聞きなれた発動機音が響いてくる。嫌な予感に振り向くと、案の定、何の迷いも躊躇いもなく一機の九

六式艦上戦闘機がこちらに向かってきていた。

懐かしい——それはそうであろう、杉本はこの基地に来て以来、乗り慣れている九六式艦上戦闘機——九六艦戦には乗っていない。反対に、九六艦戦の後継機となる戦闘機——かの有名な零式艦上戦闘機、つまり零戦の慣熟訓練を受けており、今自分に向かって突入してくる九六艦戦を久々に出会った長年の友のように見上げている。

だが、九六艦戦の搭乗員は杉本の感傷にも存在にも気が付いていなかった。進路を変える気配はまるでなく、そのまま遠慮なしに杉本に突っ込んできたのだ。こんな場所でしかも友軍機に轢き殺されるなど、死んでも死にきれないではないか。杉本は大きく迫る音と戦闘機に我に返り、慌てて道を譲った。

「てめえっ！　どこの奴だか知らねえが、一度走るのをやめたらまた一からやり直しなんだよ、この大馬鹿野郎！」

喚いて地団太を踏むが、爆音はそれらをなぎ倒し、機は見事な着陸を決めた。

「残念だったなあ、杉本」

降りてきた機に向かう杉本に、山崎がするりと寄ってきた。

「隊長！　だって今のは避けないと無理でしょう！　不可抗力です、俺のせいじゃありませんよ！」

「そういうこともあるさ、戦地では」

「どういうことですか！」

二人が機の傍まで来ると、丁度杉本の怒りの矛先になっている搭乗員が顔を出したところであった。彼は群がる整備兵に一言も発さずに機から降り立った。

航空眼鏡を取りスカーフを取って現れたその顔の異様さに、戸惑いのさざ波が立つ。

「ここは横須賀の海軍基地でありますか」

冷たく鋭利な声と視線とを持つ搭乗員であった。彼の顔の右半分には大きな切り傷が走り、先ほど切られたばかりと言わんばかりに血を滴らせそうなほどに赤く爛れている。手には日本刀が握られていたが、鞘は赤茶色であり、柄には晒しが巻かれていた。海軍でこのような軍刀を持つものはいない。いとすれば陸軍であろうが、戦闘機の搭乗員が柄を晒しで——柄が血を吸っても滑らぬように巻く晒しの不気味さが、春の日の光を反射させて不気味に浮き上がっている。

そして、彼の瞳の色は漆黒ではなかった。鈍色のそれは鋭い刃の——彼が手にしている軍刀を抜き放てば現れるであろう、この世で最も切れ味鋭い刃物のそれと同じであり、その血の通わぬ目で、山崎と杉本とを見ていた。

「そうだけど」

まるで銃口を突き付けられたかのような居心地の悪さに、杉本は不貞腐れたように言い捨てた。しかし、搭乗員は顔色一つ変えないでいる。

「第一〇航空隊の織田少佐殿はどちらにいらっしゃるか」

海軍搭乗員の姿をしているというのに、言葉にどこか陸軍の匂いがし、ますます杉本の神経を逆なでる。

「あそこの建物だよ。入って右の突き当たりがそうだ」

反抗的な無言を貫く杉本の代わりに、山崎が優しく答えた。すると彼は敬礼し、足早に去ってってしまった。

杉本は小さく舌打ちをし、足元の石を蹴飛ばす。

「あいつ、陸さんじゃないですか。なんで九六艦戦に乗っているんですか」

陸さんとは陸軍のことである。陸軍と海軍は同じ国の軍隊ではあるが、どこか張りあうところがあり、海軍兵達は陸軍をこう呼んで小馬鹿にすることもあった。

杉本は愛しい九六艦戦が恋敵に奪われたかのような気分である。

「そうなのか？ でも航空服は海軍のだったけど」

山崎は頭を掻いた。

「しゃべり方といい、刀といい、ありゃ陸さんですよ。俺たちの鞆は黒でしょう。陸さんは大陸だから茶色」

「詳しいな、お前」

容易に納得し感心したように声を上げる山崎に、杉本は少しばかり肩をすくめた。

「本当かどうか知りませんがね。それに、いちいち殿を付けるなんて、そういう面倒なことは海軍じゃしませんからね。俺、今までに隊長殿って言ったことはありませんよ」

「へえ、かっこいいなあ、隊長殿かあ」

向ける視点が山崎は違う。空に上がれば機敏な思考をする彼は、こうして陸地に立っていると鋭さはどこかに消えて、とぼけた考えを遠慮なく口にするのだった。

杉本はそんな上官に説教をするかのように言う。

「そういう問題じゃないですよ。どうしてお堅い陸さんが海軍にくるんですか。隊長、何か聞いていないんですか。中隊長でしょう。あいつ、どこの部隊に配属になるんですか」

「とりあえず、お前は一万メートル走ってこい」

山崎は大きく腕を空に突き出して伸びをし、元いた場所へと歩き出した。話を逸らされたのだが、杉本はそのことに気がつかない。慌ててその後を追う。

「そんな、あと半分ですよ」

山崎は思案げに顎を撫でながら、小さな声で言った。

「じゃあ、大便所掃除でもいいよ。あそこの掃除は駆け足よりは楽なんだが、鼻が曲がるんだよなあ。杉本知ってるか？ この前、あそこに蜂の巣があって、尻を刺された奴がいたんだよ。あれは可哀相だった。仰向けに寝られないし、飛行機にも座れない」

「.....走らせていただきます」

杉本は上着を脱いで山崎に押し付け、走り出したのだった。